



この人に 聞く

「臨床血液」は会誌としての役割だけではなく、若手の医療従事者の教育ツールとして重要な役割を果たしている。「この人に聞く」では、血液学の発展に寄与した偉大な先生方に貴重な話を伺う。今回は第84回日本血液学会学術集会会長の赤司浩一先生に語っていただいた。

進行役＝黒川峰夫
東京大学医学部血液・腫瘍内科

黒川 今回は第84回日本血液学会学術集会の会長を務められた赤司先生にお話を伺います。

赤司先生、学術集会の大会長、誠にお疲れ様でした。学術集会は会員全員が本当に楽しみにしているイベントで、学術的にも、そして会員の皆様が一堂に集うという貴重な機会であったわけですが、ここ数年はオンライン開催となり、なかなか直接対面する機会がなかった中で、今回は久しぶりに対面開催を交えたハイブリッド開催となりました。この形式で赤司先生が開催して下さったことで、会員の先生方から、大変喜んでいるという声をたくさん聞きました。本当にありがとうございます。一方で、ハイブリッド開催に関するいろいろ検討事項も多かったり、最後までコロナ禍の問題など、状況を常に見極め、非常に慎重に判断をされた部分もあるかと思います。今振り返っていかがでしょう。どういう学術集会だったかということが何かあればお言葉をいただければと思います。

赤司 ここ2回の学術集会はリアル開催がほとんどできませんでした。昨年の第83回学術集会は完全にWeb開催でしたが、執行部の一員として現地に伺いました。当然ですが、誰とも会えない。本学会での情報が頭の中に整理できない。対面開催の重要性を今更ながら痛感し、私の時にはできれば対面で開催しよう、開催できるだろうと踏んで、対面重視ハイブリッド開催という言い方にしたんです。とにかくなるべく会場に来てくださいと。ただ、どれくらいの人数が現地に来る気持ちになれるかということが大問題でした。もちろんコロナもありますが、当時九州大病院の病院長をやっておりましたので、コロナ第1～3波到来時あたりの経験を計画段階で持っていました。コロナ感染者数が増えてきた時の気持ちとか、減ってきた時に人はどういう行動を取るか、感覚的に分かっているところがあるので、この状況下ならば現地開催ができるという感触と、それからもう一つ、大体コロナ対策というと、何をしちゃいけない、これをしちゃいけないという具合に考えて、いろいろ計画しますが、私は、何をしたいか、そちらの方向で考える癖がついていたので、全体としては半分、そして半分よりちょっと拡大には耐え得るみたいな、最低でも現地参加者半分は欲しいなという感じで組みました。結果は大方読みが当たったということです。教育講演は従来よりかなり減りました。それは、あまりに枠数を増やすと個々の部屋が小さくなる。だから、ある程度ルーズに散ってほしいということで、場所的な制約もあったんですけど、教育講演の数をこれまでの3分の2程度に減らし、部屋の数をある程度抑えました。最終的には現地参加者は3,500名、オンライン参加者は3,911名でした。合計7,411名という過去最高の参加をいただくことができた次第です。



黒川峰夫先生（左）・赤司浩一先生（中央）、後藤明彦先生（右）

黒川 すごい。過去最多ですか。

赤司 最多のはずです。結局何が良かったかという、ハイブリッドという方式が重要で、医療機関の制約もあって出て来られない人も来るというか、Webで参加するんです。だから、今後の学会においてもオンラインで参加できるということにしておくのが当分は必要であるということが分かりました。通常のように6,000人ちょっとよりも1,500人くらい多かったの。元々の予測参加人数は5,800人にしてたんです。そうしたら7,400人でしょう。そうすると参加料だけで、予想より1,500人以上多かったですから、会場参加費が増えた分をハイブリッド代に充当しておつりが来ました。ハイブリッド形式にすると、Web参加が増えて現地に人が来ないということには今後つながらないと思います。今回対面でもとても良かった、という反応の人が多かったからです。現地に来るということは、休みを取って参加するということと同義であり、結果として学会に集中できるということじゃないですか。Web参加だとパソコンで見ながら、でも日常業務も降ってくることは避けられません。自分を時間的にフリーにして参加するという意味でも、そして参加者層を全体的に増やして予算を確保するという意味でも、ハイブリッド開催はこれから必須だと思いました。

黒川 素晴らしいです。赤司先生が病院長の管理者としてのご経験などをフルに生かし、人の動き方を分かっているところはすごいなと感動しました。

赤司 生かしたというか、肌感覚でかなり分かっているということでしょうか。緊縮疲れを吹き飛ばせという気持ちもありましたし。

後藤 以前からおっしゃっている「It's difficult, not impossible」。できないではなく、やれることを考えてやるという赤司先生のポリシーがとても生かされた学会だったという気がします。コロナ禍以前の学術集会と比べてもあまり違和感がなかったです。

赤司 違和感なかったですね。現地参加人数は4割くらい減っているんですけど、会場のサイズ感と現地参加人数のバランスのせいかもしれません。福岡国際会議場はそういう意味で場所的にちょうど良かったのでしょう。

黒川 オンラインで参加している人たちも次回からは現地参加していただける可能性もありますよね。

後藤 コロナ禍での対人活動する上で、心理的な敷居をかなり低くしていただいた学術集会だったように思います。

赤司 初めは会議場の隣にあるサンパレスをコンサート用に使用する予定でした。2,500人くらい入る大きなホールがあるん

です。で、どうしようかな、コンサートをそこでやってしまえ、と。そうするとそこが大きな会場になるから、全体的に人の波が希釈されるのではないかな、と思ったのですが、途中でやっぱり、コロナ禍の今は無理かなとも考えていました。ずっと迷っていたのですが、いよいよ世の中が暗くなったフェーズでサンパレスを手放したんです。結果的には非常にいいバランスでまとまりましたが、やっても良かったんじゃないかと少し心残りでした。さらに大懇親会を計画できなかったことも含めて。

黒川 初のハイブリッド開催でしたが、心は対面開催ということですね。本当に大盛況、大成功の学術集会だったと思います。演題数はどのくらいでしたか。

赤司 演題数は一般口演が482題、ポスターが615題。計1,097題です。これまでと演題数はほとんど変わらなかったと思いますが、教育講演をちょっと減らしました。3割減程度にしたんです。

黒川 一般演題が学術集会の命です。参加者の方が演題を応募してくださるのは非常に大事なパートなので、演題数が1,000演題を超えたのならそこは間違いなく大盛況だったろうなと思います。

赤司 シンポジウムは有意義なディスカッションを進める上でも、基本的に国内演者は現地に来てくださいとお願いしました。Webで話せるから問題ないといっても、何もかもがそれだと厳しいと思うんです。だから、発信する側は、海外演者以外は来てほしいと依頼しました。最終的には海外演者の方も結構来日してくれました。

後藤 確かに先生が希望された生きたディスカッションを展開させたいというマインドを会場で感じることができました。

黒川 ライブとWebでは話の迫力が違いますよね。

黒川 発表会場でのコミュニケーションも発表後のコミュニケーションも、復活して本当に良かったと思います。さて今回の学術集会のテーマへのお考えやプログラムの特色などいかがでしょうか。

赤司 プログラム委員会が結局は決めていくんですけど、皆さん、私が会長を務める学会だということもあってでしょう、私の専門分野を意識して組んでくださったと感謝しています。例えば、幹細胞のセッションも白血病幹細胞がトピックでした。白血病もAMLのセッションが分厚かったし、私自身の意見も多少ありましたが、プログラム委員会の委員の先生方が好み陣容にしてくださいました。それから会長シンポジウム、あれはゲノム医療のことを九州大学の前田高宏先生に組んでもらいました。今後の造血器腫瘍がんゲノム医療の導入に当たってということで全般的な解説をいただいたのは非常に良かったと

思います。実際、あのシンポジウムはアクセス数が本当に多かったです。終わった瞬間に確認したら1,800人くらい見てくださっていました。

黒川 すごい数ですね。会場開催でやる以上に、見ている人数は多い可能性がありますね。

赤司 加えて、同時に複数のプログラムを見ることは叶わないので、後から別に見たかったプログラムを見ることができる。これがハイブリッドの大きなメリットです。

後藤 いいところ取りですね。

赤司 ハイブリッドにしておく与会期終了後にオンデマンドもできるから、さらにアクセス数が増えていました。学術集会終了後、1ヶ月くらいの間オープンしました。重要だと思います。今後もこの開催方式は選択肢に入るでしょうね。

黒川 オンデマンドで見方も多いですか。

赤司 多いです。横並びのプログラムは現地でも見られないし、Webで参加してる人は日常診療をおそらくやっているから、他に対応することが様々起こってくる。どちらにおいても後から自分の都合に合わせてプログラムを見られるというのが大きいと思います。実際に、ほとんどのプログラムで現地参加人数とWeb視聴アクセス数がほぼ同じでした。

黒川 そうなると学術集会の新たな活性化につながる可能性がありますね。学術集会の達成度が一層高くなる感じがします。

赤司 学術集会のプログラムサイトでは閲覧したいプログラムそのものをクリックすればダイレクトに閲覧できるという構造にしました。

後藤 ダイレクトにアクセスできるって重要です。何度もクリックしないと見たいものに辿り着けないとなると、途中で嫌になっちゃうんですよ。

赤司 分かります。面倒くさくなりますよね。

黒川 タイムテーブルから聴講したいプログラムにダイレクトにアクセスできるのはいいですね。

後藤 ワンクリックってとても大事だと思います。こうしたスタイルを実現するためにかなり時間をかけて各所と話を詰めていかれたのでしょうか。

赤司 前回の第83回学術集会が完全Web開催となって、事務局や運営会社、企業も初めてのことで対応に大変苦労しました。結果成功に終わらして、その時の試行錯誤が今回に生かされていると実感していますし、私自身が過去の学術集会の運営にかかわってきたことも、今回スムーズに開催できた大きな要因だと思います。あと数年経てば全部均一化し、ハイブリッドスタイルがさらにスマートにでき上がっていくでしょうね。

黒川 まだコロナ感染に気を抜けない状況下で、海外演者の先生方が結構たくさんお見えになったとのことですが、ご苦労はあ

りましたか。

赤司 演者に関しては、ほとんど苦労はありませんでした。海外演者の先生方も、3年目だからもう慣れているのでトラブルも何もありませんでしたし、彼らも閉塞感があったところなのか、とても楽しみにして参加してくれました。

黒川 ポスター会場では私も直接ディスカッションができ、リアル開催の良さを再認識したのですが、ポスター展示や会場面で気を遣われたことはありますか。

赤司 会場に入ると、まず企業ブースが配置されていて、その奥にポスターがあるというレイアウトにしました。本末転倒かもしれませんが（笑）。メイン会場からポスター会場が離れていたため、ポスターに行くために企業ブースエリアを通過する必要があります。ポスターにも企業展示にもどちらにもアクセスしてもらおうというレイアウトです。

後藤 それとメイン会場と展示会場が少し離れていて屋外を歩いていけないといけませんでしたから、雨が降らなかったのも良かったですね。

赤司 天気には会期中恵まれました。好天が続いたのは運だと思っております。

後藤 不躰な質問かもしれませんが、赤司先生は第118回日本内科学会総会の会頭を務められ、これから第83回日本癌学会学術総会の会長もされますね。そのような中で、日本血液学会の学術集会の会長というのは先生の中でどのような位置付けだったのでしょか。

赤司 内科学会は完全に自分の手を離れてる感じなんです。自分で決めることができるのは自分の会長講演だけです。あとポスターを好きにデザインできることだけです。あの時は、専門医維持のための点数を取りに行く会としての参加目的で、Web視聴が得意でない人が現地に来ている、そんな感じがしました。学会終了翌日には蔓延防止法がスタートしたという緊迫した時期の内科学会で3,000人くらい現地参加しました。私自身も、自分で学術集会そのものにコミットするというよりは、私としては、母教室である九州大学第一内科の先輩方とか、九大の他の医局の方々とか、九州地区の内科学教授の方々とか、よく存じ上げている人たちが周りで見てるので恥ずかしいことはできないぞという感じです。衆人環視の中でやるようなものだから、私自身の思い入れとかよりも公の顔を見せながらやる感じ。一方、血液学会は自分の完全なホームグラウンドなので、何やってもいいぞ、やっちゃおうみたいな感じです。本当に気心が知れた仲間ばかりだから、血液学会の学術集会ほど楽しい学会はなかったです。おそらく次の日本癌学会もそうはいかないと思います。

運営会社の人が「日本血液学会の理事の方々は普通じゃなく仲

がいいと思う」と。「他の学会ではそうはいかない」と言われていました。内科の中ではマイナーというか、血液疾患に特化した一つの集団だからかもしれません。例えば消化管関連と云ったら、たくさんの消化器病の学会があるでしょう。外科系と内科系でそれぞれ異なる理事がいて。でも、日本血液学会と日本臨床血液学会が合併したために、この分野では圧倒的に力があって全体をカバーする権威ある学会として存在しているし、理事同士の交流も本当に密になったと思います。

また、血液学会の会員は皆忙しいスケジュールをやりくりして必死で参加してくれます。それは血液学自体が面白いからだと思うんです。面白いというのは、学問として面白いということでもしょうけど、治療へのアプローチ、最新の技術がどんどん投下されているという意味です。今、基礎医学も大きなグラントを取ろうと思ったら、結局アウトプットは何ですかと問われるじゃないですか。そのアウトプットといわれる、つまりヒトに、臨床に手が届かせないといけないという基本的な姿勢がある中で、血液学というのは臨床そのものが科学的なところがあって、基礎にいかなくても臨床をしていけば、血液の場合は研究もかなり基礎的なことをやっているという気になるじゃないですか。学問が好きな人が臨床に打ち込めるような環境だと思うんです。そこが血液の先生たちが学会活動に対して一生懸命になれるところなのではないかと思えます。

黒川 それは鋭い視点ですね。ややもすると、臨床をやっている人が同時に研究もやるようにという方向になりがちだけど、研究をやる人が血液の臨床自体が好きになる可能性が高いということですね。

赤司 そうです。逆に臨床に没頭していても、例えばCAR-Tとかやっていたら絶対に基礎的な、臨床的にもそうです、メカニズムを知る、何をするって、すぐ深いところに行きたくなる。そういう流れが両方からきちんと、基礎側からも臨床側からもあるので、学術集会の意義が特に高まる気がします。他の分野がそうじゃないというわけじゃないけど、そういう傾向があるのは間違いないと思います。

黒川 血液学は、臨床と基礎研究が近いと昔からいわれてる領域ではありますけど、ますますそれがいいかたちで。

赤司 それが臨床にアプローチできるようになってきたということです。

後藤 本当にそうですね。遺伝子治療も、ゲノム医療も本当に基礎と臨床が直結ですもんね。

黒川 臨床の科学化の程度が非常に高い領域ですよ。

赤司 究極の免疫療法ですからね、特にCAR-TやBiTEは。もちろん免疫療法の歴史は骨髓移植から始まってますけど。そういう領域であるということが、学術集会の存在意義を高めてる

と思います。血液はほとんどずっと当分の間そういう位置であり続けるだろうと思いますので、若い人へのメッセージといえはこういうことをきちっと伝えて、チャンスをあけて、とりあえずは日本血液学会の学術集會に参加してみなさいとブッシュしながら、だんだんわれわれのマインドに染めていく感じかもしれません。

黒川 話は変わりますが、研修医セミナーも現地開催できるようになるといいですね。

赤司 いわゆる大津セミナーですね。今だったらもっと面白くできると思います。ここ2、3年Web開催してはいますが、臨床が随分変わりました。大津セミナーは面白くなるんじゃないかな。ある症例をどう治療しますか、というクエスチョンに対する答えに対しても治療オプションの数がぐっと増えてますしね。

黒川 そうですよ。治療のオプションが増えたから盛り上がりますよね。では最後になりますが、「臨床血液」へのメッセージをお願いできますでしょうか。

赤司 日本語の雑誌を持っている、そしてそれなりのインパクトファクターもある英文誌も持っている、というのは非常に贅沢なことですね。普通の学会ではこんなことはできません。これは守らなきゃいけないと私は思っていて、棲み分けるといふより、英語の論文と日本語で分かりやすく読めるというのは、日本人にとってはとても重要じゃないかと思います。そして特殊な特集もやるし、「この人に聞く」ではこんな与太話を載せたりもするし、やたらと過去を語る方が出てきたりするし。

後藤 「Be Ambitious!」ですね。前回のシリーズを冊子にまとめてしばらく経ちましたし、そろそろ復活させて新シーズンを開始してもいいんじゃないかなって思います。

赤司 面白いと思いますよ。人間、いろんな言葉をその時その時に思うんだけど、整理された、取り澄ました言葉しか原稿として載せないじゃないですか。そうすると消えていくんです。あの時にいったい何を考えてどうしたかというのが残るのは対談

とか、いろんなことを、自分の言いたいことを言う場所があれば残っていくと思います。私の九州大学第一内科は創立120年くらいなのですが、きちんとした同門会誌を毎年作るようになって70年近く経ちました、その間、ひたすらいろんな人の話を載せています。今は研究室系譜シリーズというのをやっています。私の教室はまだ昔のスタイルですから、循環器、膠原病、血液、腫瘍、感染症と広い領域の研究室があるんです。で、それぞれの歴史を語ろうと。いったい誰が始めて誰が引き継ぎどうなってここまで来たのか、そしてどこに向かうのか。もう残り少なくなった長老を捕まえてきて、いろんな話を掘り出して皆でまとめるんです。そうすると全く知らなかった経緯が分かってくる。その時の空気感まで甦る。そしてPDF化して、同門会サイトで、サムネイルで目次が表示され読めるようにしています。読んでみると、なるほどこういう考え方でこれを行ったんだとか参考にできることがたくさんあります。そういうのを残す意味でも、臨床血液でもやっておくと何かひもとく時に役に立つ。直接は役に立たなくても何か迷った時に役に立つのが歴史で、そういう役割も「臨床血液」にはあるんじゃないかと思います。

黒川 とても貴重なご意見をいただきました。改めて「臨床血液」誌の記事やコーナーについて、検討を重ねたいと思います。

赤司先生のご尽力で、このたびの学術集會は以前からの良かたちを取り戻していただいただけでなく、一段とグレードアップするとともに、今後の学術集會の在り方のお手本を示していただいたような思いです。学会員の皆様も大変元気づけられたことと思います。また「臨床血液」誌にもこの上ないエールを贈っていただきました。この応援を糧にして、本誌が学会員の皆様にますます愛されるよう、誌面作りに取り組んでいきたいと思ひます。赤司先生ならびに学会員の皆様には、今後もよろしくご指導のほどお願い申し上げます。本日は本当にありがとうございました。